

中国旅行詠の世界

——西安・洛陽——

高崎 淳子

王十八の山に歸るを送り、仙遊寺に寄題す

かつ たいはくほうせんと おいで ちゆう

曾て太白峯前に於て住し、

數々 仙遊寺裏に到りて来る。

黒水澄む時に 潭底出で、

白雲破るる處に 洞門開く。

林間に酒を暖めて 紅葉を焼き、

石上に詩を題して 綠苔を掃ふ。

惆悵す 舊遊 復た到る無きを、

菊花の時節 君が廻るを羨む。

「林間に酒を暖めて 紅葉を焼き」は『和漢朗詠集』『平家物語』『徒

然草』によって、日本にひろく流布している詩句である。人口に膾

炙したこの詩句の原典と源流をたどれば、中国陝西省盩厔県仙遊寺

に到る。この詩は翰林学士として長安にあった白居易が王質夫が仙

遊谷に帰るのを送り、旧遊の地である仙遊寺に寄題したものである。

前年の元和元年（八〇六）盩厔県尉白居易は、王質夫と陳鴻とともに

に仙遊寺に遊び、「長恨歌」をなした。陳鴻は「長恨歌伝」を書いて

たのである。安祿山の乱で、長安から逃れる玄宗皇帝が、楊貴妃を

馬嵬坡で殺す。その興平県にある馬嵬坡はすぐ近くであり、楊貴妃

の悲劇から五十年経っていたことが、その執筆動機とされている。

「長恨歌」の『源氏物語』への影響を思えば、その千年紀にあらた

めて、偉大な詩業詩徳を考えるのである。

一九九五年三月二十九日、私は念願の仙遊寺に行くことができた。

菜の花畑や春の緑が秘境に誘う風景として展開し、想像以上の感動

に包まれて、溪谷へ降りていったのを忘れられない。隋文帝の避暑

地としての仙遊宮時代を物語る塔や、毛沢東の流麗な書「長恨歌」が、

この寺と谷の時間を表現していた。

空を鏤めし星はかぎりなき空港に降り立てば西安の夜のひそか

なる

つねにあたたかき握手は今も吾を包む星は氷壁の降るごとき下

星は傾きぬむれる西安の街つたうはるか恋いて来しころの西

安

近藤芳美『聖夜の列』一九八二年刊

首都北京で中国に入国し、さらに内陸へ飛ぶとき、西へ西へ太陽

を追いかける時間を体験する。暮れなずむ西への飛行は、異界へのおのきに似た緊張をうむ。西安という都市、それは長安であったり、西安事変の西安であったりする。主体にとつての感情や意義の深さに比例して高揚感も加速される。遙かな次元への飛行が、麦畑や漢の墳丘へ降下するとき、ようやくたどりつく西安に期待は全開するのである。簡素な西安国際空港は、秦都咸陽にあり、西安市街へはさらに車で一時間ばかり走らなければならない。

近藤芳美は一九八一年五月、初めての中国旅行をしている。「空路北京へ」「北京逗留」「長城」と旅程にそつた作品が続き、「西安」に入る。その後「成都」「重慶」「三峡」「武漢」「上海」と展開させている。この旅行詠を収めている「聖夜の列」にあつて、「西安」は最も歌数が多く、詠嘆的叙情を表出している。

ひっそりと鎮まる空港に到着した旅人を、空を鏤めた星が歓迎する。夜と星がきらびやかにかつひそやかに第一歩を詠嘆させている。詩的高揚を感じさせる冒頭詠である。「星は氷壁の降るごとき下」はイメージ性の強い語句である。前歌集「樹々のしぐれ」に「月光のかそか氷片」がある。ただしこれは霰が降りしきる場面である。五月で氷壁は天候的に不合理な表現であるが、月ととるべきだろうかと考え、星かもしれないとも考える。初出の「未来」一九八一年十月号では、つねにあたたくき握手は今も吾を包む星の降ることき西安に来て）となつている。この方が実感により近い自然な表現である。星が鮮明な第一歩を照らしだしている。まだ見ぬ恋のごとくに西安を思い描いた月日があるのである。

秦嶺はひと日見えざれば遠き没り日麦野熟れ出ずる長安城ここ

は

昏れむとして大雁塔の階下るなおしさやけし竹群の日の
逝く流れを渭水と言えり見るもの茫々として朝より乾く

『聖夜の列』

咸陽は秦の孝公が遷都し、始皇帝の統一まで発展する。兵馬俑坑を見学したスケールで、項羽によつて焼き払われた阿房宮の壮大さを想像する。秦の故地である関中平野は、漢帝国の都たる長安を形成していくのである。さらに三国、五胡十六国、魏晋南北朝を経て北周、隋、唐は、「閼隴集團」と名づけられた支配者層によつて、秦漢の故地で誕生するのである。隋の大興城をもとに大唐帝国の長安城は継承され、世界帝国の首都として繁栄を極める。

長安の二月 香塵多し、六街の車馬 声轆々。

家々樓上 花の如き人、千枝万枝 紅艶新たなり。

簾間の笑語自らに相問ふ、「何人ぞ占め得たる長安の春」と。

長安の春色もと主無し、古来尽く属す紅樓の女。

如今奈何ともするなし杏園の人、駿馬軽車 擁し將ちて去る。

石田幹之助「長安の春」の巻頭を飾る韋荘の詩は、李白の「少年行」などとともに、長安の繁栄ぶりを高らかに詠いあげ、長安への憧憬を促してきた。杜甫「春望」は安史の乱で破壊された長安への郷愁をそそってきた。その後復興した長安城を黄巢の乱が破壊する。

待到秋來九月八、 待ち到る秋來九月八

我が開後百花殺。

我が花開く後は百花殺れん

衝天香陣透長安、

天を衝く香陣長安に透る

滿城盡帶黃金甲。

滿城尽く帯ぶ黄金の甲

二〇〇八年春日本公開された映画「王妃の紋章」で印象的な詩に出会った。原典を探すと、『全唐詩』に載っている黄巢作の「不第後賦菊」であった。映画の映像とともに忘れられない一篇である。

帝都は欲望と王権篡奪の場である。ささの韋荘が「秦婦吟」で（含元殿の上には狐兎行き 花萼楼の前には荆棘滿つ）と嘆くに至るまでに大明宮や興慶宮は荒廢し、崩壊していくのである。昭宗李暉の天祐元年（九〇四年）、黄巢の腹心だった朱全忠によって洛陽に遷都され、その後帝都に復することはなかった。元代には安西城となり、明太祖朱元璋によって「西安府」になる。

近藤芳美が詠う渭水や長安城はこのようなエリアなのである。「慈母の恩」の意味をもつ慈恩寺は、六四八年太子李治によって母である文德皇后の追善のために廢寺跡地を利用して壮麗な大伽藍を建造し、六四五年天竺から帰国していた玄奘を迎えた。仏典を漢訳するかたわら、天竺から持ち帰った經典と仏像を安置するために塔の建立を計画し自ら設計したのである。李治は高宗となり、六五二年五層一八〇尺の磚塔は、仏舍利一万粒あまりを収め、經典は安置された。塔の南門の左右には、褚遂良筆の「大唐三藏聖教序」と「大唐三藏聖教序記」が飾られた。これが現存する大雁塔の前身であり、「慈恩寺の浮図」と呼ばれた。やがて老朽化した塔を則天武后の時代、すべてに磚を用いて二層増し樓閣様式としたのである。

慈恩寺の塔に題す 章八元

十層突兀として 虚空に在り

四十の門は開く 面面の風

却つて訝る 鳥の平地の上に飛ぶを

自ら驚く 人の半天の中に語るを

廻梯 暗かに踏めば 洞を穿つが如く

絶頂初めて攀れば 籠を出づるに似たり

落日の鳳城 住気合し

滿城の春樹 雨濛濛たり

白居易と元稹によって名篇とされたエピソードをもつ詩の風情は、塔に登ったことのあるものに感動を呼び戻す。東西南北に開かれた窓から、四季の風景のように市街がみえる。とくに西は遙かなシルクロードへの夢想をかきたてる。現在やや傾いている大雁塔の黄昏は、大陸的風景であり、西安の大シンボルである。

咸陽橋わたり西域に行きつたう道はるかにて日は小さからむ

ここに於て君ら「兵車行」の詩を告ぐる行きとよむもの遠く曠野を

『聖夜の列』

近藤芳美が社会派として詩人として杜甫への傾斜をしている。この初回の旅も杜甫のあとを訪うことが、目的の中にある。土岐善麿がそうであったように、杜甫を敬愛し、そのあとを訪ね、その詩精神を確かめた文人は少なくない。田川純三氏もそのひとりだが、「兵

車行」についての文章が、近藤の歌の理解を深くしてくれる。

天宝十一年（七五二）のある日、杜甫は長安北郊の渭水にかかる咸陽橋の上で立ちつくしていた。人を満載した車馬が音をたてて通っていく。馬がかなしげにいななき、互に大声でよびあう人の叫喚が満ち、橋上にはただならぬ喧噪と土埃がみちていた。

その前年、ちょうど杜甫が制科に下第となった年、唐王朝の諸軍は辺境各地に戦って敗戦をつづけていた。夏四月には鮮于仲通が雲南で南詔（異民族の国）と戦って六万の兵を失い、つづいて高仙芝の軍が遠く中央アジアのタラス河畔（キルギス共和国南部）で大食（サラセン）軍と西域の支配権をめぐって戦って大敗、さらに当時なお范陽節度使として北辺の防備に当たっていた安祿山が契丹と戦って敗れた。天宝十年の、こうした一連の事態は、開元末年以来兆していた辺境の諸国諸氏族の唐王朝への叛乱・侵攻がしだいに重大な局面を迎えつつあることの表われであった。

うちつづく敗戦は、何よりも兵力の不足をもたらし、それが人びとに直接的な影響を及ぼした。あくなき壮丁狩り―徴兵が唐王朝の全土で行なわれたのである。

杜甫が咸陽橋で目撃したのは、徴召された兵士と見送る家族の阿鼻叫喚の光景であった。杜甫はそれを三十四句に及ぶ古詩「兵車行」にしつかりと記録した。

天宝十年の作とする説もあるが、「麗人行」とは趣向の大きく違

う情景を提示しながら痛烈な古詩は、漢武帝時代から数多の歴史上の人物達の往来を背景に、民衆の悲惨を描いて結んでいる。

君見ずや 青海の頭
古来 白骨 人の収むる無く
新鬼は煩冤し旧鬼は哭し
天陰り雨湿るとき声の啾啾たるを

近藤芳美が咸陽橋で見ているものは、平和な情景とオーバードラップして、「兵車行」の情景にはかならない。

降るとき星の港をよぎりたり西安の月いまだ細き夜
大雁塔の影長き夕べとなりながら塔の下桐の花満ち咲けり
鄭州の月をここに恋いにし杜甫ありき今日西安の低き三日月
近藤とし子『溢れゆく泉』一九八二年刊

「西安にて」と題されたとし子夫人の一連が、傍証のごとく響いてくる。この夫妻の西安詠の初出は一九八一年十月号の「未来」である。

西安に葉種の熟るる季を来て人刈れば背丈を越えて靡けり
空を鏤めし星はかぎりなき空港に降り立てば西安の夜はひそかなる
近藤とし子
近藤芳美

前述したように、夫妻は西安から成都・長江方面を武漢から上海に至る旅程を辿っている。ここで私は、拙文『近藤芳美の字品』（現代歌枕紀行）共著）を執筆したとき印象的であった近藤の戦争体験を思い出した。少年期を過ごした広島島の連隊に入隊したのは昭和十五年九月である。船舶工兵とし字品陸軍棧橋から輸送船に乗り、武昌に上陸している。初年兵として敵前上陸戦の訓練を受け、この部隊は「晝部隊」と呼ばれた。十六年に負傷し、肺結核が判明して、武昌野戦予備病院、南京陸軍病院、湯水鎮陸軍療養所、上海南市陸軍病院と後送され、原隊追及のため陸軍輸送船で字品に帰り、兵站病院に収容され、十七年五月召集解除される。近藤が属した船舶工兵隊は南方各地を転戦の末、全滅している。

吾にかなしきあかつき部隊といふことば今日幾度聞くふるさとに
来て

字品埠頭のあとはいづくか朝の町肩落し行く病兵のまぼろしは
吾

近藤芳美『異邦者』一九六九年刊

歌文集『中国感傷』の記述を引いて道浦母都子は武漢一帯への旅の悲痛を論じられているが、そのようなことを内在しながら、西安に寄せた近藤夫妻の叙情を現代として受けとめたい。

同じ未来短歌会の川口美根子は一九七七年の西安詠を『紅塵の賦』に収めている。

山西省よぎりし小さきプロペラ機低くなりつつ麦の芽見え来

恋いて来し旧都長安幻影は吹きとべり西安駅の群衆に
楽遊原の丘をぞ見んと登りたり杜甫の佇ち瞻し大雁塔の窓

川口美根子『紅塵の賦』一九八一年刊

あとがきに〈平和条約締結七ヶ前、初めの旅は、前年八月の四人組検査の余波の只中で、十年間の文化革命終焉の、エポック・メーカーキングな出来事のさなかでした。幸運にも二年半後に再訪の希みがかなえられ、二度目の旅では、懸命に経済発展へ向かう都市のめざましい変貌を見ました。〉と語るように、感動の律動がよく短歌の韻律にのっている。

北京からプロペラ機で入る西安にやはり麦が見える。しかも芽であるので季節感とともにこまやかなイメージがわいてくる。長安を想い描いた日々の後に、現前に押し寄せる群衆人民は、圧倒的現実を展開し認識させる。そんな地上から杜甫を慕って大雁塔を登るのである。ここには、近藤夫妻の叙情と同方向の志向が見られる。それは、未来短歌会が志向している文学の内在を表現しているとも言えるのである。

龍門の下にて作る
白居易

龍門澗下塵纓を濯ふ、

閑人と作りて此の生を過ごさんと擬す。

筋力は將つて諸處に用ひず、

山に登り水に臨み詩を詠じて行く。

龍門澗下とは、どのようなところなのか。近年漢詩をグラビアで

解説する著作は多いので、おおよそのイメージは抱ける。二〇〇八年三月末洛陽に行くことが出来た。小雨まじりの風に吹かれて龍門を散策することになった。抱いてきたイメージと現前のイメージが重なりながら、その間を風が吹くような感覚に襲われた。伊水の流れば静かだが、荒いものをひそめる風情をしていた。兩岸の楊柳は青々と風姿を添えていた。「蒼浪の水清ければ 以て我が縷を濯ふべし」を想起するのはいうまでもない。

南省より 去りに衣を拂ひ、東都に來たりて扉を掩ふ。

病は老と齊しく至り、心は身と同じく歸る。

白首外 綬少なく、紅塵前事非なり。

懐しいかな 紫芝の叟、千載心相依る。

「太子賓客を授けられ洛に歸る」は、太和三年（八二九）白居易五十八歳の感慨である。宝曆二年（八二六）二月末、白居易は洛陽に帰った。太和元年秘書監として長安に住むが、持病や競争のため、洛陽に戻ったのである。隠栖したいと思いつながら、家門の長としての責任や実際の生活のためもあるのであろうが、白居易がとった「中隱」という思想態度は、洛陽における晩年と終焉をつらぬいている。陶淵明に魅かれる現代人とも共通の心情を含有しながら（大隱は朝市に住み、小隱は丘樊に入る）ならば、自分は「中隱」という態度を創出し、香山居士となるのである。

伊水の東に香山、西に龍門山、石窟は兩岸にあり、香山寺と白居易の墓がある白園は東山にある。白園は人民の憩いの場になってい

るらしく荒れた感もある。詩人の墓所にしては風情に欠けるが、しばらく登ると、たしかに墓があった。龍門の風を聞き、長い人生の旅路の果ての簡素な詩碑は、白居易にふさわしいのかもしれない。陶淵明の墓に詣でたときは違う感慨が領した。

白園から降りてすこし歩いてまた登る。「香山寺二絶」の山寺、内部は工事中だったが、伊水を眺め、月を家山の月としてこの地を愛した詩人のこころを感じることができた。

東山側から見ると龍門石窟の代表作である奉先寺の盧舍那仏はずばらしく、則天武后をモデルにしたと言われる唐の顔をしている。中国三大石窟は、敦煌・雲岡大同とこの龍門である。かの木下李太郎は『支那南北記』において洛陽に至りながら龍門に行けなかった痛恨を表現している。先年三、四時間行っただけであったので、一、二週間逗留しようと思っただけ許可申請したが、県吏が土匪が多いことを理由に許可しなかったというものである。そのような雰囲気も確かに有している。

洛陽といえば、魏の都であり、曹操「短歌行」や杜康酒を思い浮かべるのであるが、龍門の景勝が気に入る洛陽城を造営したのは隋の煬帝である。大業元年（六〇五）三月に着工し、十ヶ月あまりの奇跡的な突貫工事で完成する。過酷な労働のために、死体を載せた車が毎月何十キロメートルも続いたという。豪奢好みの煬帝が、函谷関以東、江南の地を制圧し、同時期に建造された大運河によって、華中・華南の物資を流通させていった天下経営のための新都造成であった。周平王東遷の紀元前七七〇年の洛邑から九朝の古都として繁栄する隋唐洛陽城であった。唐の初め一時期東都から格下げされるが、高宗の顯慶二年（六五七）ふたたび東都となり、両都制のも

とに繁栄する。その頂点は、高宗・則天武后と玄宗の時代である。武則天が周朝を樹立した時代は首都「神都」とも呼ばれる。

北魏の太和十九年（四九五）に始まる石窟造像は、北魏の滅亡によって中止されるが、則天武后朝に最盛期となる。高宗のころ、西山の中央部に高さ十七メートルの大盧舎那仏が造られた。このとき武后は脂粉錢二万貫を寄進したという。朝日に燦然と輝く姿が莊嚴といわれるが、小雨に濡れる大仏は、その端麗さはかわることなく、堂々と威光を感じさせていた。

龍門の磨崖の仏顔ぶつがほ欠けいまずに手を触れにけりあたたかき石

そそりたつ磨崖のうへに全円の絮そよぎをり双眼鏡に見ゆ

龍門の伊水のほとりに感傷して終二の立ちしはいづこあたりか

宮英子『天蒼々』一九九七年刊

私が訪れた龍門で、ガイドは道教の仏教排斥によって顔を破壊された石仏がたくさんあることを説明してくれた。

中国においても、仏教弾圧の時代がある。それは宗教抗争というよりも経済的世俗的動機が多いとされる。儒教の合理主義と夷狄の宗教である仏教の迷信性が対立したり、道教との相克が時代を席巻した。中国で三武一宗の四大弾圧と呼んでいる最大のものである会昌五年（八四五）の弾圧は道教に凝った唐武宗によって行われた。円仁は訪れた唐でこれに遭遇したのである。還俗させられたり、旅程にさらなる困難を余儀無くされたことは、『入唐求法巡礼行記』に詳しい。

宮校二の『山西省』は戦地歌集としてあまりに有名である。英子

夫人の海外各地への旅行詠は多彩で歌数でも他を圧倒している。なかでも、『山西省』ゆかりを訪ねた旅行詠には格別の叙情がある。

終二の死んだのは、つい先ごろと思うのに、いつの間にか一年半が経たった。改めて歌集をとり出して読みかえすと、生前気付かずに過ぎていた歌に出会って、ハッとそこで立ち止まる。

中国に兵なりし日の五ヶ年をしみじみ思ふ戦争は悪だ

あつき夏の空となりたり仰ぎつつ若く兵なりし山西省おもふ山西省を詠んだ晩年の歌のうち「戦争は悪だ」の方は、昭和五十九年一月の朝日新聞新春詠だったが、発表当時から「戦争は悪だ」が喧けん伝でんされていた。その前年の、コスモス三十周年パ

ティで、突如マイクを握った終二が非核署名を呼びかけていたこともあって、あわせてこの歌が評判になった。

「あつき夏の」の方は、死ぬ前年の六十年九月号「短歌現代」に載った一連の中の歌だが、この歌にはポイントがないので、むしろ「また終二の山西省か」ぐらいで読み過ごされたのではないだろうか。しかし、私はいまこの歌をしみじみ読みかえすこの歌に引かれる。終二の山西省への思いが痛いように響いてくる。気付くのが遅かった。

終二の出征は昭和十四年八月、二十七歳であった。青春というにはおそいが、そのおそい青春の、独身時代のすべてを五年間戦地で過ごした。「若く兵なりし」と、老いても感慨をたたえて詠う終二の心に至り得なかった後悔にさいなまれて、私は終二の戦い過ごした山西省を訪ねてみよう、と強く思うようになった。終二の、というよりみずからさわだの騒立さわだつ心をしずめる巡

礼の旅と言った方がよいかもされない。

『雁信片々』で宮英子が語る旅の動機はどのような解説より説得力がある。昭和四十九年七月西トルキスタン、つまりソ連シルクロード方面をスタートに宮英子は、精力的に海外旅行をしている。中国への初旅は、日中友好国交回復十年を経た昭和五十七年八月で、富山県シルクロード調査隊に参加したものであった。山西省への旅は、第一回昭和六十三年四月、コスモスの有志に田谷鋭や高野公彦が同行している。これは宮柵二の死後実施された「山西省柵二の旅」であり、その後回を重ねていく。『天蒼々』から前掲した作品は、桑原正紀編「宮英子渡航記録一覽」によると第五回目のもにあたる。

宮柵二生前に計画された山西省への旅は、初回は朝日歌壇のもので、ご本人も車椅子でと考えられていたが、ドクターストップがかかったのである。その後、コスモスで独自に計画したものは、大隊本部のあった寧武へは行けず、コスモスの種を思う場所に蒔いたという。その五年後に『雁信片々』に熱い思いで語られる宮英子による「山西省への旅」が始まるのである。

咲きそめし百日紅のくれなゐを庭に見返り出征たむとす

しほし程汾河のほとりに下りいゆく緬羊の群を目追ひ優しむ

ころぶして銃抱へたるわが影の黄河の岸の一人の兵の影

薄沱河の水の響の空を打ち秋は来にけり大きな石の影

こゑあけて哭けは汾河の河音の全く絶えたる霜夜風音

宮柵二『山西省』一九四九年刊

『山西省』の世界を論じることが、この論の主題ではないので、深く立ち入らないが、宮英子の旅行詠の背後にある巨大なものとして、若干ふれておきたい。

昭和十四年召集されて、横浜鶴見道灌山の家で出征の歌を詠う。十五年山西省に至り、汾河のほとりの歌には、まだ人間的ゆとりがある。しだいに戦争の状況の中に入りこみ、読みすすむのがつらいつと思わせる作品になっていく。大黄河にまう一兵の影こそは、その象徴ともいえる。その後『山西省』の代表歌として多くの記憶にある薄沱河の歌が登場する。具体的にイメージすることは困難であるにもかかわらず、よい響きを持つこの歌には情景を形成する詩的パワーがある。緊密な精神と言葉のはりが、詩的イメージを創造するのである。やがて十八年十一月師北原白秋逝去の報を受け慟哭する。律高く「塞下悲報」十三首は奏でられる。やがて「帰還暫日」で歌集一卷のドラマは終結する。

小高賢は『宮柵二とその時代』で、『山西省』の構成や作品の初出や未発表既発表等詳細に検討したうえで、戦争文学として豊かな真実を提供していると論じている。事実であるかないかという議論が優先されることは文学としての厚みや、真実を軽んじることになりかねないのである。戦後の作かもしれないというものはあるにしても、歌集としての価値を損なうものではない。

『山西省』を遺産のように継承する結社「コスモス」が、その歌枕を訪う旅を何度も実行するのは、文学エネルギーだと言える。その旅行詠の中で、宮英子の洛陽を詠った短歌はむしろ軽く感じさせるのであるが、戦場であった山西省をやや離れて、東都洛陽と龍門を訪うときの深呼吸するとき叙情を肯定したい。むしろそっけな

いかにみえる宮英子の歌もその意味において重いのである。

山西省東流しゆく溇沱河をさかのぼりしばし渚に憩ふ
青の樹の川原の楊ひとむらに川音を聞く歩み入り来て

宮英子『忽そらごと』一九九一年刊

茫漠と流れ来てかつ流れ去るたどざまにして溇沱川ひろし
柵二遺髪を埋めし目じるしの白楊汾河源流の青きひとむら

宮英子『幕間—アントラクト』一九九五年刊

今年また棗の老木に会ひにけり山西省溇沱川の道しるべなる
溇沱川を越えて入りゆく木原みちしみに青し棗の林は

『天蒼々』

繰り返し詠い継がれる溇沱河は詩的磁場を獲得している。さきの『雁信片々』の「溇沱河を求めて」によると、五台山の裾を清冽に流れる清水川が溇沱河に合流する。柵二の歌の溇沱河は、清水川の下流つまり溇沱河上流での五台作戦のとき詠んだものらしい。原平付近の河にも本流にも「大石の影」の面影はなかったという。

黄河本流に遭わむ願いに連れらるる邙山の道黄土捲き上ぐる

一人間文明の発生をこの岸に思えとや黄河の濁り地を浸すはて
倭の使人遙か朝貢しここに至る彼ら「黠面文身」の民

暮れ落ちて洛陽に入るころ影立てる漢魏の故城土坡をそれとて
近藤芳美『メタセコイアの庭』一九九六年刊

後漢の光武帝の金印「倭奴国王印」や「魏志倭人伝」にともなう

邪馬台国論争を、歴史のロマンティックとして享受し楽しんできた。近年歴史学や人類学等の進展にともない、倭人像も変化して来ている。鳥越憲三郎著『中国正史・倭人・倭国伝全釈』は、『漢書』から『旧唐書』まで十一種の史書の倭人・倭国について記したものを読み下し、語注解説した労作である。それは〈中国の南部に横たわる長江流域に発祥し、稲作と高床式住居を顕著な文化的特質として、東南アジア諸国からインドネシア諸島嶼、さらに朝鮮半島中・南部から日本列島に移動分布した民族で、それを「倭族」という新しい概念で捉えた」ものである。従来の「倭人」という語の先学者の誤りや、辞書の常識の誤解を指摘し、〈黄河流域を原住地として政治的・軍事的に覇権を掌握した民族が、とりわけ秦・漢の時代以降、彼らの迫害によつて四散亡命した長江流域の原住民に対して、蔑んでつけた卑称〉と定義されている。このような論説でリセットされる邪馬台国論争等あることは、夢をくだかれることであり、拡大することでもあるだろう。

山口県には土井ヶ浜遺跡があり、海をみつめる三百体弥生人骨がある。その人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏のご講演や著書の「始皇帝に追われて大陸を逃れた人々」という説に驚いた記憶とも重なり、洛陽に朝貢した「倭人」のロマンティックの果てに津波が押し寄せてどこかに連れ去られる感に襲われる。

「黠面文身」は、『後漢書』から『三国志』の「魏志東夷伝倭人」「晋書」にまでみえる記述である。近年まで琉球・台湾に残り、今では雲南省奥地の独竜族にしか見えない入れ墨「黠面」は顔面に施し、「文身」は身体に施す一である。

近藤芳美の胸中に、どの時点での歴史的見解があり、この「倭人

の使者」を詠ったかは明らかではないが、茫洋とした思いは伝わってくる。洛陽博物館二階にある魏書の拡大版の前に立ったとき、同様の思いを抱いたが、入れ墨を短歌に取り込んで作品化しようとは思わなかった。「倭人」はどこから来たのか、卑弥呼の使者は来たのかというロマンティックの方が私には好ましかった。

近藤芳美が「一人間と文明」をテーマとして思想として持ち続けたことは明解である。そのことを文明発祥の地であり、中国九朝の帝都である洛陽で、「倭人」とリンクしながら叙情したのである。

はるかこのあたりまで来て光武帝に金印賜うと君に知るものを
則天武后の殺しし長子の低き塚麦の野遠く見つつ行く旅
いずく行きても麦畑曠く熟れ初むるさきわいありて訪るる洛陽

近藤とし子『さいかちの道』一九九七年刊

とし子夫人の『さいかちの道』中「黄河」の作品である。夫妻の度重なる中国への旅は多くの旅行詠を生み、濃やかな観察と人間への思想が一貫して安定した叙情を創造している。

西安・洛陽は中国大陸の二代古都であり、大帝國をなした歴史の帝都である。中国に惹かれるものにとって大幻想の地でもある。それぞれ古都幻想と現前の人民都市のはざままでいかに詠ずるかは歌人にとって大いなる課題であると同時に悦楽でもある。戦争体験を内在した近藤芳美・宮柁二とその夫人達の中国旅行詠を中心に現代短歌が表現する二都を論じた。

【主要参考文献】

『長安の春』石田幹之助 東洋文庫

『中国の都城2長安・洛陽物語』

『近藤芳美集』近藤芳美

『雁信片々』宮英子

『杜甫の旅』田川純三

『中国文明の成立』杉丸道雄・永田永生

『東アジアの世界帝国』尾形勇

『長安』佐藤武敏

『円仁唐代中国への旅／「入唐求法巡礼行記」の研究』

エドウィン・O・ライシャワー 田村完誓訳

『支那南北記』世界紀行文学全集木下李太郎

『中国正史 倭人・倭国全釈』鳥越憲三郎

『日本人と弥生人』松下孝幸

『宮柁二とその時代』小高賢

『鑑賞・現代短歌 近藤芳美』小高賢

『宮英子の歌』桑原正紀

『全唐詩簡編』高文編

【引用詩歌テキスト】

『近藤芳美集』近藤芳美

『溢れゆく泉』近藤とし子

『未来』一九八一年

『川口美根子全歌集』川口美根子

『さいかちの道』近藤とし子

平凡社

集英社

岩波書店

本阿弥書店

新潮選書

講談社

講談社

講談社学術文庫

講談社学術文庫

修道社

中央公論社

祥伝社

五柳書院

本阿弥書店

雁書館

上海古籍出版社

岩波書店

雁書館

未来短歌会

沖積社

砂子屋書房

『天蒼々』 宮英子
『山西省』 現代短歌全集
『ゑそらごと』 宮英子
『幕間―アントラクト』 宮英子
『杜甫 下』 中國詩人選集
『漢詩の事典』
『白氏文集』 新釈漢文大系

短歌新聞社
筑摩書房
石川書房
石川書房
岩波書店
大修館書店
明治書院
(たかさき・あつこ)